村松研究室

［災害復興全球全史 - 過去から未来を見通す - ］

生産技術研究所

http://www.shinlab.iis.u-tokyo.ac.jp

建築・都市史、都市遺産・資産開発学

建築学専攻

1.　災害復興全球全史の構想

21世紀に入って、2004年12月のスマトラ島沖地震、2010年のハイチ地震、2011年3月の東日本大震災と、大規模な自然災害が多発しているように見受けられます。しかし、そうした直近の現状を「非常事態」として特別視するよりは、中長期的視点に立ち災害を繰り返し発生する「日常」として捉え、その類似点や差異を明らかにする姿勢のほうがより生産的であると考えます。その際には、歴史的パースペクティブが必要となります。本研究では、「災害復興全球全史」と題し、現生人類約40万年の歴史における災害とその後の復興を分析することで、未来の災害復興を見通します。

2.　対象とする災害

災害は大きく、自然現象に起因する「自然災害」と人的要因に起因する「人為災害」に分けられます。本展示では前者の「自然災害」を対象とし、太古の気候変動から東日本大震災に至るまでの9つの災害について分析しています。

3.　なぜそこに住むのか

自然災害に関しては、気象災害も地変災害も、間隔は違えども繰り返し同じ場所で発生します。近年の研究では、古代文明の多くが実は災害発生リスクの高いプレート境界付近で発生していることが指摘されるなど、災害と人間の居住地には深い関係があることが考えられます。

そこで、災害復興全球全史では、災害復興過程における人の移動の有無（適応/移動）とその手法を分析するなかで、人がなぜその場所に住むのかという根源的な問いに対する答えを模索したいと考えています。

【同時開催】東日本大震災写真展

本展示に合わせて、写真家・淺川敏氏による三陸沿岸集落の写真展も開催します。淺川氏は2011年の被災直後から現在に至るまで、定期的に三陸の被災地を訪問し、その被災状況や復興途上の被災地を撮影してきました。5年間に撮りためた写真の一部を展示します。